

複雑性の文法は可能か

南 不二男

1 はじめに

表題を「複雑性の文法は可能か」という問いの形にしたが、この小文をそれに対するまともな答…つまり、可能か可能でないかという内容のものには出来そうもない。そうではなくて、もしそれが可能だとしたら、まずどのようなことを確かめておかなければならないか、また文法上の複雑性をさぐるとしたら、どんなところにそれが見つかりそうかといった問題を取り上げたいと考えている。

最近話題になっている複雑性あるいは複雑系の研究が、私が文法と複雑性ということに関心を持つようになったきっかけの一つであることは否定できない（エドガール・モラン〈著〉、古田幸男・中村典子〈訳〉1993ほか）。しかし、そのほかにも動機がある。一つは、言語行動において偶然性（偶然的条件）が果たす役割、および言語的コミュニケーションにおける個別性の現れに興味をもっていただことである（南1978、1979、1984ほか。その概略は4でのべる）。もう一つあげるとすれば、文法研究において、無用の分析、無目的性の追究とでも言ったらよさそうな研究は可能かということを考えていたことである。つまり、研究上のことにも、実用的方面にも何の役にも立たない（正確に言えば「役に立つかどうかわからない」ということかもしれない）文法研究がありうるだろうかということである。式場隆三郎他『二笑亭綺譚』（1988、求龍堂刊。『定本二笑亭綺譚』の名で、1993年筑摩書房からちくま文庫の一冊として再刊された）によると、昭和のはじめ東京深川に、渡辺某という人が建てた一風変わった家があって、物がほとんど入れられない押入などがあったという。そんななんのためかわからない分析そしてその結果の記述のある文法が書けないものかと、私は考えた。なぜそんなことを考えたかという質問があっても、私はそれには答えられない。とにかく、そんな文法が出来たらどんなものだろうと考えたまでである。そうした無目的性の研究と複雑性の研究とは、直接結び付くものではないかもしれないが、やたらにことばの複雑な面ばかりを取り上げる研究、とくにいわゆる redundant な要素を取り上

げて問題にするような分析は、従来の一般的な研究の立場からすれば、なんにも役に立たぬとして排除されるのがふつうだったのではないかと思う。そのように捨てられた面を拾うということが、人間の言語の今まで気付かれなかった面を知る手がかりになるのかもしれないという意味で、無目的、無用の研究を試みてはどうかと思ったのである……もっとも、厳密に言えば、「捨てられた面を拾う」意味を考えたときに、私は矛盾をおかしていることになるけれども。

2 複雑性ということ

はじめに、どのようなことを一般に「複雑」と言うのかを、おおざっぱに考えておきたい。ごく常識的にいって、まず次の二つの特徴をあげることが出来ると思う。

- a 対象（複雑かどうかを考える対象）が、単一の要素からなるものでなく、複数の要素からなる（あるいは複数の要素に分けられる）ものであること。そして、その要素の数が多ければ多いほど複雑と考えられやすい。
- b 複数の要素があるとして、それらの相互間の関係が整然としているものでなくて、乱雑あるいは不規則であること。そして、その不規則性の程度が大きければ大きいほど複雑と考えられやすい（不規則性の程度を何ではかるかが問題だが）。ただ、この第2の特徴は、いつも妥当なものかどうかはわからない。たとえば、動力の伝達のために多数の歯車を組み合わせた装置があるとして、それらの歯車間の関係が整然としたものであっても、それより少数の歯車からなるものと比較した場合には、複雑だと言われることもあるだろう。

吉永良正『「複雑系」とはなにか』（1996、講談社）には、現在話題になっている「複雑系」ということについての「さしあたって」の説明として、「無数の構成要素から成る一まとまりの集団で、各要素が他の要素とたえず相互作用を行っている結果、全体として見れば部分の働きの総和以上の何らかの独自のふるまいを示すもの」

という記述がある。先のaとbは、一般的、常識的に考えた特徴だが、今問題の複雑性（系）については「部分の働きの総和以上の何らかの独自のふるまいを示す」ということを、第3の特徴として追加しなければならないかもしれない。

3 複雑性のありか

前の2であげた2つまたは3つの特徴が見られる現象をことばの世界で見つけようとするならば、どこに目をつけたらよいかというのが、次の問題である。それについての観点として、たとえば以下のようなものが考えられる。

- a ことばの体系的側面（langue的側面）を問題にするか、実際のコミュニケーション行動における現象（parole的側面）を問題にするか。日本語では、ものの数量を示すときに使われる助数詞（～個、～本、～枚…）の種類が多く、数えられる物（それを表す名詞）による使い分けがややこしいなどというのは、前者の見方である。英語の要求・依頼を表す各種の表現の実際の使われ方は、そのときの要求・依頼の対象となるものごと、相手、状況などによってこまかく使い分られているというのは、もちろん前者にかかわる面もあるが、後者の例として取り上げてよいものである。
- b ことばを共時的に見た場合の複雑さ（～単純さ）を問題にするか、通時的に見た場合の複雑さ（～単純さ）を問題にするか。前のaであげた例は、いずれも共時的な見方によるものである。通時的に見た場合というのは、たとえばある言語で名詞の格変化が時代とともに単純化してきたということがあれば、その1つの例とすることが出来るだろう。
- c ことばのどの分野を問題にするかということもある。複雑さ（～単純さ）が関係する現象は、文法の世界だけとはかぎらない。語彙、発音（音韻）、文字・表記、待遇表現、一般の言語行動など、さまざまな分野において認められる。そして、それぞれの分野について、前述のaあるいはbにおける視点の選択が問題になる。たとえば、現代日本語社会における表記に関しては、まず表記体系の複雑さを指摘することが出来る（他のいくつかの言語社会におけるそれとくらべて）。一方で、ある個人の、あるいはなんらかの社会集団のメンバーたちの表記の実態における複雑さを取り上げることも出来る。さらにまた、明治以降の欧米系諸言語からの外来語がふえてからの表記の状況と、それ以前の時代での表記の状況とを比較して、どちらが複雑だとか単純だとかといった議論をすることも出来る。

本稿では、aについては、実際の言語使用面に視点をかぎる立場をとる。bについては、共時的な見方をとる。cについては、表題に示したとおり、文法を中心とする。

4 複雑性をさぐる手がかり

視点を実際の言語使用面にかぎるとして、文法の世界における複雑性をさぐる方法にどのようなものが考えられるか。はっきりした形として提示できる案を、私はまだ持っていない。ただ、以前私が提出したことばのモデルについての仮説（南1973、1978、1984）が、一つの手がかりになると思うので、その大体を述べる。実は、それについて内容をいくつかの点であらためた新しい試案を考えたのだが（南1997）、ここでは前のものによって述べることにした。以下にその要点を列挙する。

- (1) ここで仮定することばのモデルは、一種の広い意味での生成的な考え方によるものである。おおざっぱな方向をいうならば、inputからoutputへの直線的な記述の形をとる。
- (2) 生成の過程を、ことばの要素の選択の過程と考える。
- (3) ことばの要素の選択には、かならずその選択を規定する条件がある。そして、ある条件が適用される対象と、その適用によって選択が行われた結果がある。

$A \rightarrow a/C$

ここに A=対象 a=結果 C=条件

- (4) 条件には、次の二つの種類のものがある。
 - 外的条件
 - 内的条件
- (5) 外的条件とは、言語の世界の外のことごとと認められるものである。次の三種のものを区別する。
 - 指示対象
 - 主体的意向
 - 付随的状況
- (6) 内的条件は、言語の世界の中のものごとである。まず、その言語（方言）の体系そのものをもっとも一般的なこの種の条件といえるが、さらにこまかく見ていくと、意味、言語行動の型、談話の種類などに関する諸条件、文の構造についての諸条件、音形に関する諸条件、表記に関する諸条件などいろいろのものがある。
- (7) それぞれの対象と条件については選択の規則がある。
- (8) ことばの要素の選択の過程にはいくつかの中間段階があると考えられ

- るが、その中間段階における条件の適用の対象と選択の結果は、すべてなんらかの意味での要素の類であると考え。これを「中間状態」と呼ぶ。
- (9) 選択の過程の最初の段階における要素の類は、ある言語(方言)の体系の総体である。これをかりに「原状態」とよぶ。
- (10) 選択の内容についていえば、それは要素についてなんらかの意味での限定である(いろいろな意味での限定がありうる)。段階を追って限定されていく結果、要素の類のメンバーは少なくなる。
- (11) 限定の結果、一つの要素が残ったもの、それがわれわれの目にふれ耳に聞こえる言語表現である。「最終形式」または「outputされる形式」と呼ぶ。
- (12) すべての言語表現生成の過程の構成要素は、次のようにあらわすことができる。

[L, S, F, R, C]

ここにL=原状態(問題の言語または方言の体系の総体)

S=中間状態(S1, S2, ..., Sn)

F=最終形式

R=選択規則

C=条件

また、要素選択の過程を一般化して示すと、つぎのようになる。

(L → S1)/C1

(S1 → S2)/C2

(S2 → S3)/C3

•

•

•

(Sn-1 → Sn)/Cn

Sn=F

ここまでの、南(1973)で示したモデルのあらましである。それは、言語表現を所与のある固定したものとして扱うという立場に立つものである。これは、私が考えたものだけにすぎない。一般に今までの言語表現の構造の分析に見られる傾向である。ところで、実際の言語表現は、その表す内容もまた表現の形もはじめから固定した、不変のものとしてあるのではなく、途中で変化することが出来るものである。会話の途中で話題が変わる、相手の反応を見な

がら話す、まわりの状況の変化に応じて話し方を変える、伝達的手段を切りかえるといったことがしばしば起こる。

「タカチャン、オヒルハラメン…（子どもの「またか」というような顔を見て）ハヤメテ、ピザニシヨウカ」

といった親子の会話、また、

「ソコマデマッスグ行クトカーブミラーアルヨツカドガアリマス。ソコヲ左ニマガッテ、イヤ失礼、右ニマガッテサンゲンメガD工業サンノ事務所…」

というタクシーの無線放送などがその例である。われわれの言語表現の構造には、こうした途中から介入してくるなんらかの情報に対応して変化しうる可能性（一種のフィードバックによる変化の可能性）が存在する。こうした点を考慮に入れた扱いの一応の案を考えて、南（1973）のモデルに対する修正、補足を試みたのが南（1978）である。次にその要点を簡単にあげる。

（13）一般に言語表現について、

空間的構造

時間的構造

と呼ぶ二種類の構造を区別する。

（14）空間的構造というのは、ある言語表現の全体的構造の中で各種の言語要素がその言語（方言）の体系に基づいてなんらかの構造…文法的構造など…をつくっている側面に着目したものである。たとえば「バラガ咲イタヨ」「咲イタヨ、バラガ」の二つの言語表現では、それぞれを構成している成分（バラガ、咲イタヨ）の順序が違ふ。しかし、われわれは両方ともバラ（ガ）…咲イタ（ヨ）の間に共通した（体系的）関係を認める。常識的な表現をすれば、両者とも主語…述語の関係を持つと考える。このような時には、それら二つの言語表現の空間的構造に注目していると考えられる。

（15）時間的構造というのは、まず空間的構造に時間の軸にそった線条的な形を与えて表現を実現するしくみのことである。前記の例でいうならば、「バラガ咲イタヨ」「咲イタヨ、バラガ」の間には共通した空間的構造があると考えられるにもかかわらず、われわれの目にふれる（耳にきこえる）形は違っている。その違っている形を与えるしくみが時間的構造である。さらに、途中から介入する情報に対応する変更（取り消し、訂正、追加）に関する処理も時間的構造に含めて考えることにする。

（16）空間的構造が作られることを「形成」と呼ぶ。南（1973）で

「言語表現の生成」といったのは、けっきょくこの形成のことであった。また、そこで要素の選択に関する条件および規則といったのは、それぞれ「形成条件」「形成規則」ということになる。

(17) 形成されたある空間的構造を時間の軸にそった線条的な形として表現することを「実現」と呼ぶ。

(18) 言語表現の実現には「指定」「配置」「変更」と言う三種類の過程があると考え。指定とは、形成された空間的構造のどの部分を実現するかという、その範囲の指定である。配置とは、指定された部分をどこに位置させるかということである。変更というのは、途中から介入する情報に対応する言語表現の変化についてのものである。これには、すくなくとも次の四つの段階を区別することが出来る。すなわち、すでに形成された空間的構造のなんらかの部分の取り消し、その部分についての空間的構造の再形成、再形成された空間的構造についての再指定、そして再配置。

(19) 言語表現の実現についての規則を「実現規則」と呼ぶ。それには次の三種類のものがある。

指定規則

配置規則

取り消し規則

(20) どういう場合にはどういう規則が働くかということについての条件を「実現条件」と呼ぶ。

(21) 実現条件と、さきにあげた形成条件には、共通して次の種類があると考え。

外的条件

指示対象に関する条件

付随的状况に関する条件

主体的意向に関する条件

偶然的要素に関する条件

内的条件

体系的条件

分脈的条件

空間的構造と時間的構造の関わり合いを簡単にまとめると次のようになる。

(22) 一般に言語表現の実現は、空間的構造と時間的構造の両方があってはじめて実現するものと考え。そのうちいずれか一方が欠けている場合

には、言語表現は成立しない。ここに空間的構造をsS、時間的構造をsT、実現した言語表現（最終形式）をFとすれば、

$$F=sS \cdot sT$$

(23) 言語表現実現の一般的過程は、次ページにあげた図によって示すことが出来る。

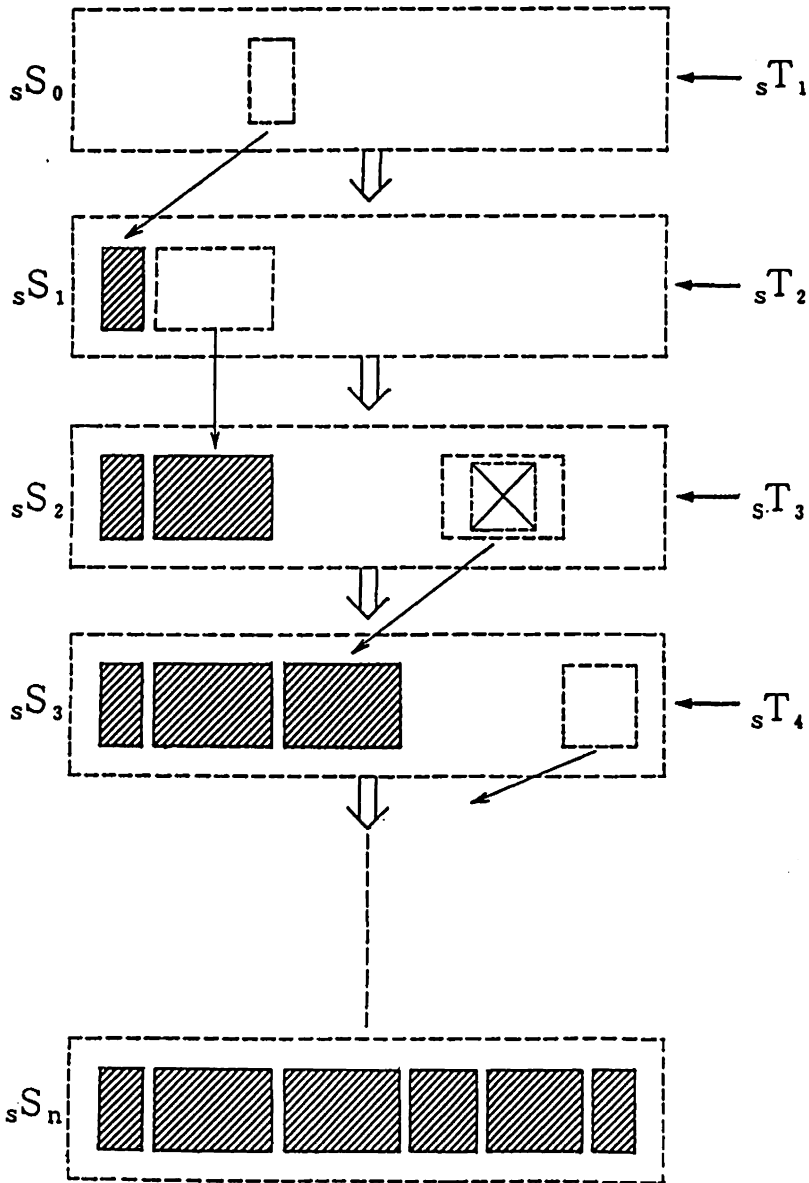
(24) 次ページの図で示した予定形としての空間的構造（実現した部分はそのぞく）は、(8)で述べた中間状態である。それを構成する要素の類については、その境界がはっきりしないものであると考える（このことについては南1973で述べた）。そうした考えに立つならば、この予定形も、何から何まではっきりきまっているものではなくて、境界のぼんやりした、さまざまな表現の可能性の集まりと見なければならぬだろう。そのように考えておいた方が、たとえば偶然的条件による予測しない表現の出現や主体的意向による独創的な表現の出現、あるいはまた理解の過程も考慮に入れた場合のコミュニケーションの内容の受け取り方に関する個人差などが説明しやすくなると思われる。

(25) 予定形としての空間的構造は、時間的構造による実現の過程を通じて不変なのではなく、実現する部分が出来ると共に、また変更される部分が出来ると共に更新されると考える。いわば前の構造は崩壊して、新しい構造が再形成されるのである。一般的に言って、空間的構造は実現の過程において崩壊と再形成をくりかえしていることになる。とはいっても、ふつう多くの場合は実質的に同じ状態が続くと思われるが、いくつかの点がだんだんとずれていって、いわゆる分脈のねじれの現象などが起こることもある。

以上の私の仮説の紹介は、南(1978)を中心としたもので、それはもっぱら送り手側の過程についてのものであった。そのあとの南(1984)では、理解あるいは受容、つまり受け手側の過程においても同様のしくみが考えられることを述べた。ここでは、それについてくわしく紹介することはしない。

コミュニケーションの機構を上述のような過程として把握しようとするならば、複雑さはそのどのようなところに現れるのか、または現れやすいのか。常識的な見方から見当をつけるとすれば、つぎの2点をまずあげることが出来ると思う。

一つは、過程の中のどのような側面がとくに直接的に関係するかということ、まず考えられるのは、前述の時間的構造、つまり変化に関係する面である。



 は実現されるべく予定された空間的構造。これを「予定形」と呼ぶことにする。その中の は指定された部分。 は配置され、実現した部分。 は指定されたが、取り消された部分。 は再形成され、再指定された部分。

もう一つは、私のいう条件についてであって、前にあげた諸条件の中の偶然的条件と呼んだものは、もっとも関係がありそうなものである。もちろん、変化には私のいう空間的構造（の形成）も関係するわけで、前の4の（25）で述べたように、それが（形成）→崩壊→再形成をくりかえすところに、なんらかの偶然的条件が加わった場合思わぬ複雑な現象がもたらされる可能性があると考えられる。金子・津田（1996）には、ある種のアリの集団活動を時系列的に追っていくと、群れの形成や移動、入れかえ、崩壊過程が見られ、そこに要素どうし間の関係が変化していくダイナミックスの様相が示されるという意味の記述がある。このことと、ここで私が取り上げたことばの問題を直接的に対比して考えることは出来ないかもしれないが、一般的に言って、なにかのことがらの時間的側面、そして偶然的要素（いろいろな性格のものがあるであろう）が、複雑性をさぐるための一つの有効な手がかりとなると、私は考えている。

5 おわりに

上に述べてきたことのほかにも、文法に関する複雑性をさぐる手がかりはいろいろあるはずである。どのような手がかりをとるにしても、さしあたって必要なことは、文法上の複雑性ということ自体の内容をできるだけ明確にすること、そして何よりもまずできるだけ多くの例を調べることだと思う。これは、実際の発話や文章の中のものでも、なんらかの方法を用いた実験によるものでもよいであろう。こればかりは、研究者がちょっと頭をひねって考え出した作例に頼るといふわけにはいかないのである。

本稿は、1996年11月野林正路氏主宰の「意味論研究会」において発表した話に手を加えたものである。

文 献

- 金子邦彦・津田一郎 1996『複雑系のカオスのシナリオ』（朝倉書店）
南不二男 1973「一つの言語モデル—仮説と疑問—」（『計量国語学』64）
南不二男 1978「言語表現における『空間的構造』と『時間的構造』」（『国語学』115）

- 南不二男 1979「言語行動研究の問題点」(『講座言語3 言語と行動』南編、大修館書店)
- 南不二男 1984「理解のモデルについてのおぼえがき」(『金田一春彦博士古稀記念論文集 言語学編』(三省堂)
- 南不二男 1997(予定)『現代日本語研究』(三省堂)
- モラン、エドガール<著>古田幸雄・中村典子<訳> 1993『複雑性とはなにか』(国文社、原著 INTRODUCTION À LA PENSÉE COMPLEXE par Edgar Morin, 1990 ESP éditeur, Paris)
- 式場隆三郎他 1988『二笑亭綺譚』(求龍堂、再刊『定本二笑亭綺譚』1993筑摩書房)
- 吉永良正 1996『「複雑系」とは何か』(講談社)

(みなみ ふじお・関西外国語大学教授)